

# 言葉について

松 里 雪 子

## はじめに

「国語表現法」の授業開始は15年程前になる。それ以前は本学のような幼児教育に関わる資格取得を目的とする養成校には必修科目としては設置されておらなかった科目である。専門性と直接には関わりがないということと、日常の表現活動において支障を来たさない程度に国語力が備わっていたということであつたと考える。しかし、徐々に様相に変化が見えてきたということである。本学の学生は資格取得のために当該施設での実習が課せられている。その際、指導案の作成を初めとして、諸々の場面において国語力が発揮されると同時に、その力が問われるのである。

実習評価表には「実習態度」(1、礼儀 2、明朗さ 3、積極性 4、強調性)「実習内容」(5、子どもとのかかわり 6、子どもの理解 7、環境への配慮 8、計画の作成 9、衛生・安全 10、保育実践)「実習記録」(11、記録の提出 12、記録の仕方 13、反省)の三つの大きな項目をおき、夫々により詳細に評価を、更には評価側、受け手と双方の内容把握がより確実なものとなるように合わせて13のチェックポイントがある。評価は「とてもよい」「よい」「普通」「やや劣る」「劣る」の5段階評価とし、最後に総合評価があり、これらの観点から実習時における学生の活動内容が評価されるということである。

近年の、日本語ブームの現象のなかにあつて、本学の学生たちの国語力の実はいかなるものか、その実習評価からも殊更関心のあるところである。ここでは、平成11年度(182人)と平成15年度(184人)の保育所実習における評価表の比較を端緒とし、効果的な指導を目指した

めに手立てを講じるため検証を試みるものである。

## 1 実習評価表の比較から

言葉の領域を考える時、我々の日常生活において表現の手段という枠内に留まらず大方がその領域内にある。共通言語(国語)を使用せずに、誤解を生じさせず相互理解のもとにコミュニケーションを的確に得ることは難しい。その意味合いからも実習の評価において、その専門性の重要さは言わずもがなであるがコミュニケーションの道具としての言葉の働きも同様その力は大い。総合評価においてくとてもよい>はH・11年度(182人)、H・15年度(184人)共に27人であるがくよい>においてはH・11年度が100人に対し、H・15年度は80人。更にく普通>はH・11年度52人に対し、H・15年度は69人である。評価が下がる傾向に数字の移動が見られる。この事は他の項目においても同様の傾向である。

言葉はコミュニケーションの道具ということから言えば、「実習態度」でのく身だしなみが清潔で、人に対して言葉遣いや挨拶など礼儀正しく接したか>の評価の観点が付記されている1の 礼儀 については

|        |          |      |
|--------|----------|------|
| H・11年度 | ・「とてもよい」 | ・64人 |
|        | 「よい」     | ・90人 |
|        | 「普通」     | ・25人 |
|        | 「やや劣る」   | ・3人  |
|        | 「劣る」     | ・0人  |
| H・15年度 | ・「とてもよい」 | ・46人 |
|        | 「よい」     | ・84人 |
|        | 「普通」     | ・52人 |
|        | 「やや劣る」   | ・2人  |

「劣る」・・・0人

＜明るくハキハキしていて、好感を与えたか＞  
の評価の観点の 2 の 明朗さ については

H・11年度・・・「とてもよい」・・・52人

「よい」・・・69人

「普通」・・・55人

「やや劣る」・・・7人

「劣る」・・・0人

H・15年度・・・「とてもよい」・・・41人

「よい」・・・67人

「普通」・・・68人

「やや劣る」・・・9人

「劣る」・・・0人

「実習内容」のなかの評価の観点＜遊びや活動をとうして子どもと遊んでかかわりを持つことが出来たか＞の 5 の子どもとのかかわりについては

H・11年度・・・「とてもよい」・・・46人

「よい」・・・89人

「普通」・・・41人

「やや劣る」・・・5人

「劣る」・・・0人

H・15年度・・・「とてもよい」・・・47人

「よい」・・・59人

「普通」・・・72人

「やや劣る」・・・5人

「劣る」・・・0人

評価観点＜子どもの中にとけこみ、積極的に理解しようとする姿勢がみられたか＞の 6 の子どもの理解については

H・11年度・・・「とてもよい」・・・50人

「よい」・・・74人

「普通」・・・52人

「やや劣る」・・・6人

「劣る」・・・0人

H・15年度・・・「とてもよい」・・・35人

「よい」・・・82人

「普通」・・・61人

「やや劣る」・・・6人

「劣る」・・・0人

評価観点＜保育の計画や準備が適切であったか＞の 8 の計画の作成については

H・11年度・・・「とてもよい」・・・12人

「よい」・・・58人

「普通」・・・56人

「やや劣る」・・・12人

「劣る」・・・0人

H・15年度・・・「とてもよい」・・・9人

「よい」・・・41人

「普通」・・・77人

「やや劣る」・・・6人

「劣る」・・・0人

評価観点＜望ましい保育活動が適切になされたか＞の 10 の保育実践については

H・11年度・・・「とてもよい」・・・12人

「よい」・・・70人

「普通」・・・73人

「やや劣る」・・・9人

「劣る」・・・0人

H・15年度・・・「とてもよい」・・・11人

「よい」・・・56人

「普通」・・・96人

「やや劣る」・・・4人

「劣る」・・・0人

「実習記録」のなかの評価観点＜要点を的確に記録できたか＞の 12 の記録の仕方については

H・11年度・・・「とてもよい」・・・27人

「よい」・・・85人

「普通」・・・63人

「やや劣る」・・・5人

「劣る」・・・7人

H・15年度・・・「とてもよい」・・・32人

「よい」・・・78人

「普通」・・・71人

「やや劣る」・・・7人

「おとる」・・・1人

13項目のうちピックアップした7項目は国語力（あるいは言葉の働き）に直結したものであるが、上記の総合評価の数値・内容を裏付けるものということになる。

この評価表の比較はH・11年度とH・15年度という少ない数量での資料ではあるが、他の当

該実習も含めて実習期間中に教員たちの巡回指導時における実習園側の指導・要望等の報告を省みても「とてもよい」「よい」の評価の数値の発展的な上昇は期待出来る状況にはないというところにある。

日常における大方が言葉の有する領域の中にあるということを大前提に、特にその言葉の働きが単なる伝達のための手段という枠にあるのではなく、言葉がもつ本来の意味・課せられた役割を充分承知の上での働き、機能の果たすべくものが先導を担っているという点からの選択である。13項目中、殊にその意味合いの強いと思われるもののピックアップである。

## 2 学生と言葉

近年の日本語ブームの現象は対極に、あるいは背中合わせに日本語の乱れの現象をおいている観がある。日本語の乱れに関しては「ら抜きことば」から始まって「さ入れことば」「コンビニことば」「居酒屋ことば」等々の流行には、その主なる使用者は若者の存在を特定している観がある。この若者は、その時代その時代においての若者である。いつの時代においても存在している若者である。その時代が、その時々々の社会が育てている若者なのである。途絶えることなく存在する若者であるから、そのブーム・現象の火付け役は彼らに限ったことではないのである。ましてや、その火種はそれ以前からあるということである。彼らの聴覚に、心の内に最初に届いたのはどのような言葉であったのだろうか、是非とも探してみたいところである。

言葉には音声によるものと、文字で表すものとがある。音声によるものの不足分を文字が補ってくれる。言葉の誕生（成立）には条件の整う必要がある。集団のなかで共同生活をするうえで相互の利益のために、意志伝達的手段として成立するためには 1 知能の発達 2 発音・調音器官の発達 3 聴覚の発達 の三つが整うことが必要であるといわれている。そして、誕生した言葉にはそれまでの間に託された思いが込められる。そして、その言葉は夫々

の履歴を所持することとなり、更にはその言葉と関わる者の意志を汲んで相互の作用から、夫々の領域において、選りすぐられた精鋭として押し出していく力を有することとなる。その働きは概ね四つのことである。 1 意志伝達的手段 2 思考を支える手段 3 自己の感情表現的手段 4 遊びの一手段 といわれている。これら四つの働きは夫々が単独でその役目を担うこともあろうが、時には二つであったり、総動員でその大なる働きを果たすこともある。それは、選択をし、送り手となる者と受け手との双方の関わり方において見えるもの、聞こえるもの、感じるものに異なりが生じるからである。最初に出会った言葉は誰からのどのような言葉であったのか。それはどのような状況において響き、伝わり届いたのか。そして、それ以後それはどのようにして留まり、あるいは広がり、その働きを続けているのか。そのことは頗る気になるところである。「17世紀に身を置きながら18世紀を支配した思想家」と評されたジョン・ロック（英 1632～1704）、啓蒙思想の創始者と言われ、人間の知識は生得のものとするデカルトの観念説に対して、それは感覚経験から成り立つと批判したといわれているロックの言葉に次のものがある。「美味とは食物そのものにあるのではなく、味わう舌にあるのである。」これは土産土法という言葉があるが風土による違い、もう少し身近に言い換えれば各個人個人の家において伝えられてきたその家の味があり、その味にはその家の文化・歴史を無視しては出会えないということである。他の家の者にとっては不味であっても、その家の者にとっては醍醐味であるということが有り得るのである。殊に嗜好品に限らずともいえることである。最初に口にしたものは何か、次の段階では何か等々、その積み重ねのなかから味覚が育っていくのである。この「食」に関しての言葉の語るものには、言葉とそれを選択して使う者との関係に共通の繋がりが感じ取られる。言葉には夫々履歴があり、それを選択し使う者にとっても、その選び方用い方において、その者の言葉一つ一つとの関わりの歴史があり、その

者固有の内なる文化があると考え。その者に固有の内なる文化の成立が、それ以後の展開にどのように作用していくのかということである。ロックは著作「教育に関する考察」の第一章 身体健康についてのなかで・・・われわれが出逢う万人の中で、十人の中九人までは、良くも悪くも、有用にも無用にも、教育によってなるものだと言って差し支えないと思われます。教育こそ、人間の間大きな相違をもたらすものです。われわれの敏感な幼年時代に与えられた、わずかの、言いかえればほとんど感じられないくらいの印象が、非常に重大な、また永続する影響を与えるのです。＞と述べている。また、「衣食足りて 礼節（栄辱）を知る」という言葉がある。言葉が人類の歴史・文化をつくり、継承させてきたと考えるならば、「食」はそれを守り、育て、支えてきた最も大切なもの、不可欠なものと言える。人類の大方は「食」に関わって「飢餓との闘いの歴史」ではなかっただろうか。いつ・どこで・誰が・誰と・なにを・どのようにして・食するのか ということは最大のテーマではなかったのではないだろうか。達意の文を書くときのチェックポイントとして5W1Hを挙げるが、「食事」の場面で、その様子を語る際には6W1Hとなり、もう一つのWである「誰と」(WITH WHOM)が入る。この「誰と」共にその食卓に着くのか、ということはとても大切なことである。「生きる」ということを考える時、「食」を抜きにしてその「考え」を構築することは可能であるが、それを実践する時「食」を抜きにして成し遂げることはできない。必要不可欠の「食」を「誰と」共に摂るのかということは、その事だけでも命題と成りうるほどのことと考える。「人生」という一人ひとりの大きな枠組みのなかで個人の総てを曝け出す「食」の場面、大なるコミュニケーションの場面に誰が誰と居並ぶのかということであれば、「言葉」の出る幕はない、と言い切られても頷かざるを得ないほどの大迫力をもつコミュニケーションの場、領域になる。それ故に理屈を抜きにして真摯に対峙させられることを余儀なくさせるものがこの言葉にはある。人間

の本質をグイと一掴みにして目の前に突き出された思いに捕らわれるこの言葉を学生たちに時折提示してきた。25年ほど前、その当時は1学年が150人ほどであったが、この「衣食足りて礼節を知る」を知らないという学生はゼロに等しかった。それが年を重ねるごとに知ってる＞＜知らない＞の割合が逆転の様相を示し、近年では（耳にしたことはあるが、意味までは判りかねる＞といった状況である。

また、日本語ブームのなかで、徐々に崩し崩しの態で、その存在を希薄にさせられているものに、ものの数え方としての助数詞がある。本来とは異なる用い方をしている。玄関前に横付けにされた数台の大型バスを見つけて、「1ッコ、2コ・・・」と声に出している二十歳に近い学生の様子は稚拙な可愛らしさを通り越して異様である。従来通りの使い方をせず、自分たちの世代だけで通用する使い方をする事で前の世代への反抗、現代という社会への反発と言うほどのものではないにしても共有していることからの仲間意識を持つ。同調し、受け入れることから同じ時代に今まさに存在しているということを実感しているとするのであれば、その用い方は許容範囲のなかにあると知らぬ振り、気づかぬ振りを決め込んでもいいのだろうか。

ものの数え方の助数詞にはそのものの後ろ盾となり、そのものの格付けを担う役があるという認識からすれば、随分と雑で味気の無いこと甚だしい。たとえば、人口に膾炙していることではあるが、ウサギをなせくイチワ、ニワ・・・＞とややこしい数え方をするのか、四足動物であるのに、といったところに疑問を抱き、調べるところに今まで知らなかった先人たちの知恵、食の文化・歴史の面白みが見えてくるのである。そのなかで先人たちが守り、育て残してくれているものとの出会いが生じる。他人が大事に守り通してきたものに、こちらも真摯に向き合うことで次第に相手もこちらに目を向けてくれて対等になることができるのである。そこで初めてそのものの醍醐味を味わうことになるのである。

言葉が総てを優先しているとは言い難い。時

に音が、音楽が、絵画が、彫刻が、舞踊が、映像が、・・・匂いが、触覚がと我々の五感を刺激するものがあり、その時その時において伝達の道具としてある。

言葉について調べると ことばく言葉・・・社会ごとに決まっています、人々が感情・意志・考えなどを伝え合うために用いる音声のまとまり。また、それを文字にあらわしたもの。また、それらの表現行為。＞（現代国語例解辞典）とある。大前提の＜社会ごとに決まっています＞という枠からすれば、瞬時にあらゆる社会の人を対象に感動を与え、納得をさせるということでは言葉の出る幕はない。音楽や絵画の芸術作品はそれらに対する予備知識がなくとも足のつま先から頭のとっぺんまで身体全体を包み込み、丸ごとの感動を与えてくれる。しかし、場面を換えて、読み解くこと、思考すること、そして表すということにおいてはどうか。それが、こと同じ時空間を共有しない者にとってはどうかであろうか。ある程度の予備知識は必要とするが、詳細に、緻密に、正確にという時、言葉ほど有能なものはない。丹念で、素朴で、純粹で、柔軟な対応のなかでは不老不死のエネルギーを持つ。

実習の評価と合わせて、本学の学生たちが、言葉についてどのように自分のなかに取り込み関わっているのか、ということについて関心がある。その実態が少しでも把握可能となれば、国語力を問われる場面への支援の手立てが見えてくるに相違ない。その目的のために本学幼児教育科1年生を対象に「言葉について」のアンケートを試みた。

### 3「言葉について」のアンケートから

次の質問項目は、まずは伝達の道具としての＜言葉の働き＞に対して日常どのような意識でいるのか、ということに合わせて、それ以後の質問に対しての意識の喚起が狙いである。

Q：1 あなたは、新聞やテレビなどで「日本語の乱れ」についての記事やニュースを目にしたことがありますか

|      |     |     |
|------|-----|-----|
| はい   | いいえ | 無回答 |
| 157人 | 24人 | 1人  |

Q：2 あなたは、普段、自分が言いたいことを相手にきちんと伝えられているとおもいますか

|     |     |       |     |
|-----|-----|-------|-----|
| はい  | いいえ | わからない | 無回答 |
| 47人 | 71人 | 61人   | 4人  |

Q：3 あなたは、普段、乱れていない、きれいな日本語を話していると思いますか

|    |      |       |     |
|----|------|-------|-----|
| はい | いいえ  | わからない | 無回答 |
| 5人 | 147人 | 31人   | 0人  |

Q：4 あなたは、言いたいことが相手にきちんと伝われば、きれいな日本語を話さなくてもよいと思いますか

|     |      |       |     |
|-----|------|-------|-----|
| はい  | いいえ  | わからない | 無回答 |
| 25人 | 135人 | 23人   | 0人  |

Q：5 あなたは、日本語が乱れていない方が、言いたいことを相手にきちんと伝えられると思いますか

|     |     |       |     |
|-----|-----|-------|-----|
| はい  | いいえ | わからない | 無回答 |
| 69人 | 47人 | 64人   | 3人  |

Q：6 次の文や語句について、A あなた自身が使うか、使わないか B 日本語として正しいと思っているか間違っていると思うか、それぞれについてあてはまるものに○をつけてください  
「こんなに たくさんは 食べれない」

|          |      |      |     |
|----------|------|------|-----|
| A あなた自身は | 使う   | 使わない | 無回答 |
|          | 133人 | 50人  | 0人  |

|          |     |      |     |
|----------|-----|------|-----|
| B 日本語として | 正しい | 間違い  | 無回答 |
|          | 48人 | 135人 | 0人  |

「先生も この本を お読みしますか」

A あなた自身は  
 使う 使わない 無回答  
 9人 173人 1人

B 日本語として  
 正しい 間違い 無回答  
 29人 154人 0人

「朝、5時に来れますか」

A あなた自身は  
 使う 使わない 無回答  
 132人 45人 6人

B 日本語として  
 正しい 間違い 無回答  
 69人 113人 1人

「ぜんぜん きれいだよ」

A あなた自身は  
 使う 使わない 無回答  
 160人 23人 0人

B 日本語として  
 正しい 間違い 無回答  
 8人 174人 1人

「ぼくの (わたしの)」

A あなた自身は  
 使う 使わない 無回答  
 118人 65人 0人

B 日本語として  
 正しい 間違い 無回答  
 23人 158人 2人

「明日は 休まさせていただきます」

A あなた自身は  
 使う 使わない 無回答  
 68人 115人 0人

B 日本語として  
 正しい 間違い 無回答  
 91人 91人 1人

Q : 7 あなたは、次の言葉遣い、気になりますか

「お会計の方、一万円になります」

A あなた自身は  
 気になる 気にならない 無回答  
 59人 124人 0人

B 日本語として

正しい 間違い 無回答  
 64人 118人 1人

「千円から お預かりします」

A あなた自身は  
 気になる 気にならない 無回答  
 60人 123人 0人

B 日本語として  
 正しい 間違い 無回答  
 60人 123人 0人

Q 1の「はい」が157人 (85.8%) は多いように見受けられるが、ブームの真っ只中にあっては当然の数字であり、「いいえ」の24人 (13.1%) は若干残念な数字と見られる。

Q 2の「はい」の47人以外の136人 (74.3%) は自信がないということである。

Q 3の「はい」は若干5人でそれ以外の97.3%の178人は謙虚であるということを経験にいれても低すぎる数値ではある。

Q 4の「いいえ」が183人中135人 (73.8%) という数字には共通言語、意志伝達のための道具としての存在としてだけではなく、国語としての日本語に対しての敬意の念が表れていると見られる。

Q 5の「はい」が69人 (37.7%) と全体の183人という数字からすれば存外低いとみられるが、この裏づけと思われるのがQ 6、Q 7の項目における数字である。元祖若者ことばとでも言われそうな「ら抜きことば」(東京方言では大正期から例が見られるといわれている)を筆頭に「さ入れことば」「コンビニことば」「居酒屋ことば」を置いたが、「間違い」と知りつつ「使う」の数値は案外高いのである。「さ入れことば」は学生たちの作文では添削でよく朱の入るところであり、大方の学生がその表現をしている。使う側では「さ」を入れることで表現が婉曲となり、そのことが丁寧さを醸し出す効果を上げていると考えているようである。

Q 7の「コンビニことば」「居酒屋ことば」の双方については183人中118人、123人が「間違い」と認識しつつその数値とほぼ同じ数値で

「気にならない」とある。これは日常のなかで、コンビニの利用が恒常的で馴れているということや、学生自身がアルバイトで自らも使用していることがその背景として考えられる。Q5の「日本語が乱れていない方が言いたいことを相手にきちんと伝えられると思うか」に対してQ3、Q4の数値と矛盾を感じる数値の裏付けのようである。因みに、学内において、正午を過ぎても、その日初めて顔を合わせると挨拶は「オハヨウゴザイマス」という学生が近年ふえてきている。

Q8では文化庁が「国語世論調査」のために、2002年の11月～12月に16歳以上の男女3000人を対象に面接方式で実施（2003年6月20日、回収率73.3%）したものに倣い調査してみた。本学の回収率は183人が全員提出で100%である。

「流れに棹さす」

本学 正解率 59.1% 文化庁 正解率 12.4%  
「役不足」

本学 正解率 52.5% 文化庁 正解率 27.6%  
「確信犯」

本学 正解率 18.6% 文化庁 正解率 16.4%  
「閑話休題」

本学 正解率 28.6% 文化庁 正解率 23.8%  
「気がおけない」

本学 正解率 35.7% 文化庁 正解率 44.6%  
「奇特」

本学 正解率 45.6% 文化庁 正解率 45.6%  
「耳ざわり」

本学 正解率 86.9% 文化庁 正解率 86.5%

正解率の比較をしてみると「気がおけない」のように9%ほど低い数値のものもあるが、大方は文化庁より高い数値を示している。しかし、この高い数値は上記の慣用句においてのみのものか、否かという疑問がある。偶然であったのか、否か。後日、伝わってきた情報によれば数値の高いものは本学の就職に関する講座において、取り上げられていたということが判明。また、最頁目にみれば本学の入試においては、慣用句・四字熟語等々がここ数年出題傾向にあ

る、ということを表明、実施していることから、その知識の蓄えがあったものと考えられる。

以上のような質問項目への回答によって、学生たちの資質の一面を垣間見ながら

Q9 あなたは、普段「言葉なんて役に」立たないと思ったことがありますか。「ある」と答えた人は、どのような場面においてですか。「入試の面接」のように具体的に書いてください。

この件では回答で「ある」は35人（19.1%）「ない」は147人（80.3%）無回答は1人（0.05%）であった。

Q2では、役を担っているという意味で47人（25.7%）に対し、Q9の同じ意味合いの「ない」は147人（80.3%）と差がある。これは「入試の面接」の具体例が緊迫感を持った究極的な場面を要求していると、受け取られた可能性があるやもしれない。因みに「ある」と回答した学生の「場面」の上位に示されているのは、

- 1、うまく言葉を使いこなせず、相手に内容が伝わりにくい時（20件）
- 2、感情的になって話す時（3件）
- 3、口ばかりで、行動の伴わない人と関わった時（3件）
- 4、外人と話し、ジェスチャーの方が通じた時
- 5、親との喧嘩（2件）

というような状況説明になっている。5W1Hを端的に想起可能とする場面の設定にはなり得ない。ここでは具体例を挙げているにもかかわらず、その質問項目の意味を読み取ることができなかったということになる。また、そのような場面への出会いが少ないということにもなるのか。これに関連させた質問項目の

Q10 「敬語」を意識して使うことがありますか。「ある」と答えた人はどのような場面においてですか に、関しては「ある」の回答数は172人（94%）、「ない」の回答数は11人（6%）であった。「ある」場面の記載は複数回答で293件であるが、上位から記してみる。

- 1、目上の人との会話（135件）
- 2、先生との会話（47件）
- 3、アルバイト先での先輩や客との会話（24

件)

- 4、初対面の人との会話 (20件)
- 5、先輩との会話 (19件)
- 6、実習先での会話 (14件)
- 7、尊敬している人との会話 (5件)
- 8、電話での会話 (5件)
- 9、面接 (4件)
- 10、頼みごとをする時 (4件)

とある。Q9において「ない」が80.3%で、Q10の「ある」の94%は言葉の働きの意味、重要性については大分認識をしており、使い分けの必要性についても認識をもっているということになる。しかし、

Q11の「敬語」を使うべき場面において、十分に使い分けができていますか。「いいえ」と答えた人は、具体的にどのような場面においてであったのか書いてください。という項目では「はい」は64人(35%)で「いいえ」は118人(64.5%)である。「いいえ」の具体的な場面としては119件挙げられている。上位から

- 1、「敬語」の使い分けが分からない、自信がない。(41件)
- 2、先生と話す時、タメ口を使う。(15件)
- 3、目上の人の前では緊張し、普段の言葉遣いになる。(13件)
- 4、慣れていないので咄嗟には使えない。(7件)
- 5、電話での実習園との会話。(4件)

このQ11もQ10と同様に1位で41件が具体的な「場面」の記載がない。先人たちが語る「女の器量はことば遣い」は殊更に女性に限らず、「人の器量は・・・」と言い替えても今の時代なら特に説得力があるところである。日本語・フランス語教師の野口恵子氏はその著「かなり気がかりな日本語」の第1章<大学生と言葉>のなかで

言葉づかい一つで人格に対する評価まで下されるのは日本人でも同じだが、外国人学習者が日本語のコミュニケーションにおいて不利益をこうむらないようにするのが日本語教育の目的の一つであり、その意味でも必要最

低限の敬語の習得はおろそかにできない。

と、記している。学生たちは微に入り細を穿つほどには敬語の使い分けを習得はできていないが、丁寧語・尊敬語・謙譲語の使い分けによってコミュニケーションがより可能となることは認識できている。しかし、日常のなかで、恒常的に必要とされる場面の経験が少ないことから、その術を磨くことが希薄となっているようである。<タメ口>というものがある。「広辞苑」の第5版(1998、11、11第1刷)にくため>が載っている。第4版には載っていない。「ため」・・・相手と同程度の地位であることを言う俗語。「・・・口」と、ある。広辞苑に載ることからある種の市民権を得たということであろうが、使われていたのは、それ以前からということである。

Q4で<あなたは、言いたいことが相手にきちんと伝われば、きれいな日本語を話さなくともよいと思いますか>では「いいえ」は135人(73.8%)であった。きれいな日本語、美しい日本語とは具体的にはどのようなものであると考えるのか。野口氏は前述の著作の第5章 豊かな日本語力をつけるためのセルフ・トレーニングのなかで

現実の口頭コミュニケーションにおける正しく美しい日本語の条件とは、相手に誤解を与えないことと、相手に不快感や不信感を抱かせないことに尽きるのではないかと思う。相手に誤解を与えないためには、現代の日本人が共通理解事項としているところの日本語の文法、語彙、音韻などの体系を無視するわけにはいかない。

規範とかけ離れた「日本語」を勝手に作って話せば、言いたいことが相手に通じないだけでなく、相手から疎んじられるのがおちである。

と述べている。若者ことばのなかで<ため口>は定着して、彼らの表現の場への入り口を狭くしている。

言葉の力、領域は広い、ということは周知の



ことではあるが、言葉それのみでの存在は困難である。使い手と受け手があって、その役を果たしているのである。その周辺についての質問を

Q、2 あなたは、友人への大切な用件はどのような方法で伝えますか。その「理由」は  
Q、21 あなたは、家族への大切な用件はどのような「方法」で伝えますか。その「理由」は  
の、形でおいた。「方法」はQ20では、直接会って話す（119件） Q21では、直接会って話す（143件） 理由としては双方とも、顔を見て話すことで大切さが伝わり理解され易く（誤解を受けない）一番確実であるから、というものである。

マジヨリー・F・ヴァーガスは「非言語コミュニケーション」（石丸 正訳）の＜九つの非言語メディア＞のなかで

非言語コミュニケーション研究のリーダーの一人、レイ・レ・バードウィステルは、対人コミュニケーションをつぎのように分析している「二者間の対話では、ことばによって伝えられるメッセージ（コミュニケーションの内容）は、全体の35%にすぎず、残りの65%は、話しぶり、動作・ジェスチャー・相手との間のとり方など、ことば以外の手段によって伝えられる」と。

と述べている。また、松居 直氏もその著作「絵本が育てる子どもの心」の＜絵本は読んで語る＞のなかで

コミュニケーションの専門家の話によると、人間のコミュニケーションの55%は声の調子としぐさ、言葉は残り10%でしかないそうです。ですから、文字と活字の向こうに隠れている90%を私たちがちゃんと思い描かないと、読み取れず、また感じ取れずに本当に自分で言葉の世界に入っていくことができないわけですね。特に自然ににじみ出る表情はとても大切です。

と述べている。マックス・ピカートはその著作「沈黙の世界」（佐野利勝訳）の＜言葉と身振り＞のなかで

言葉は人間の存在そのものに属している。言葉は人間の存在の一部であって、それと融合しているのである。「私はかたくそう信じているのだが、言葉は直接に人間の内部に置きあたえられたものと見なされねばならない。人間がただの一語を、単に感覚的な動機としてではなく、明確に発音された一つの概念をあらわす音声として真に理解するためには、言葉はすでに完全に、また連関をなして人間のなかに存在していなければならない。」（W・フォン・フムボルト）

まことに、言葉はただの他の一つの存在からのみ、しかも言葉の存在性よりも更に強力な存在性を有する一つの存在者からのみ演繹され得るのである。

と述べている。このことから考えると学生たちは言葉の限界、領域の狭さというものを十分に了解しているということである。そうであるからこそ、「大切な用件」であっても（であるからこそ、というべきか）特に家族の対する時の方が数値が高いのである。友人よりも長く多く、同じ時間を共有した関係であればこそである。

#### 学生と言葉 敬語について

コミュニケーションをとるうえでの敬語の果たす役割は充分認識のなかにあるが、その力を知るためには、どうすればよいのか、ということである。日本語は時折、難しいと実感する場面があるがその一つは、文章のなかに主語が見えないことがあるからである。よく、隠れている。主語がその文のなかで一々確認され、提示されていることは若干ならず鬱陶しさを感じるということはないわけではない。（明々白々に表すよりも多少控えめに、というところに奥ゆかしさが醸し出され、受け入れ易さをリードさ

せるということもある) そうしたマイナス面を省くために、読み手の読解力に頼るのである。その際、主語をどのような方法で引き出すのか、といえ、敬語の存在である。この敬語がどのように使われているのかということ、その主語は自ずとそのすがたを表すのである。それでは、その術をどのようにして習得するのかというと、それは話す・聞く・読む・書くという行為においてである。

まずは聞くこと。言葉をたくさん身につける段階において、どれほどの言葉を聞いたのか。どのような言葉をどのような状況のなかで、誰からの声で聞いたのかということが気になることである。松居 直氏は<絵本は声の文化>と題し定義しておられるが、子どもにとっての絵本は読書人生への登竜門的存在と捉え、学生に次の質問をした。

Q、29 絵本の読み聞かせで一番記憶に残っているのは誰ですか？ また、何歳頃まで読み聞かせをしてもらいましたか？

「読み手」への回答は158件あり、その「読み手」の上位は

- |             |                |
|-------------|----------------|
| 1 母 (79人)   | 2 幼稚園の先生 (25人) |
| 3 保育士 (15人) | 4 祖母 (8人)      |
| 5 両親 (6人)   | 5 先生 (6人)      |

「何歳頃まで」への回答は137件あり上位は

- |            |                |
|------------|----------------|
| 1 5歳 (44人) | 2 6歳 (40人)     |
| 3 7歳 (12人) | 4 7歳~10歳 (11人) |
| 5 4歳 (9人)  |                |

Q、30 絵本の読み聞かせを誰にしてほしいと思っていましたか？ また、あなたの好きな絵本のタイトルは？

の質問にたいしては「誰に」への回答は168件で、上位は

- |             |            |
|-------------|------------|
| 1 母 (107人)  | 2 両親 (13人) |
| 3 祖母 (12人)  | 4 先生 (11人) |
| 5 特になし (6人) |            |

「とくに好きな絵本のタイトル」については回答者は全員である。上位は

- |                        |
|------------------------|
| 1 「ぐりとぐら」(シリーズを含めて16人) |
| 2 「ノンタン」のシリーズ (12人)    |

3 「おしおのぼうけん」(8人)

4 「14ひきのあさごはん」のシリーズ (5人)

5 「はじめてのおつかい」(4人)

この絵本のタイトルに関しては、31位からは一冊について一人、ということで80冊に近い絵本のタイトルが並んでいる。学生たちが特に絵本に触れる機会の多かった幼児期は、日本の絵本の出版の状況としては1970年代前後の一つの大きな波が過ぎて、静かで穏やかな波のなかにあった頃で、よい作品が多く容易く選ぶことができ入手可能であった頃と思われる。Q29で、「実際に読み聞かせをしてくれた人」とQ30の「読み聞かせをしてほしい人」の第一位は同じく「母親」であったが、183人中でQ29は79人で43.2%、Q30は107人で58.5%となり、希望がかなえられていない子どもたちが、そのマイナス分いたということである。

評論家の大宅壮一氏(1900~1970)が、テレビが急激に普及し出した60年代前半に「一億総白痴化」という言葉で、日本人の思考パターンに与えるテレビ文化の影響を懸念し批判したのであったが、学生たちの親世代は正にその時代を生きてきた世代とも言える。「テレビに子守りをさせている」という言葉も聞こえてきた時代であった。TBSの「日本むかしばなし」は昭和50年の開始以来25年間継続した。この長寿が視聴率を物語っているが、本来昔ばなしは機械からの音声ではなく語る人の傍にいて、語り手、聞き手の双方の心のキャッチボールで展開させていくことが嬉しいものである。松居 直氏は前述の著作の<豊かな言葉に包まれて>のなかで、

皆さんが絵本を子どもによんでやるということも、実は子どもを言葉で抱くことなのです。と、述べている。正にこのことである。「昔ばなしは、先人たちの心のもてなし」といわれる。昔ばなしには先人たちの教え、生きていく上での知恵がある。知恵の宝庫である。それは、面と向い合っている心のキャッチボールであるからこそ、その宝はより身近なものとなり、自分のものとなり得るのである。

本学の学生が、大切な用件を伝える手段とし

てく(顔を見て) 直接会って話す>と記しているのは、その事を指しているのである。言葉の働き、コミュニケーションのとり方で、言葉だけでいえば高々10%。顔の表情・身振り・手振り、そして触れる感覚の効果といえは「言葉はいらない」という状況を引き起こしかねない。この時、松居氏の上述の引用した「言葉で抱くこと」は大きな意味を持つ。じっと目を見る、時には尻や頬を叩く、そして、更に時には何も言わずに抱き寄せしっかりと抱きしめる。このことだけでも慰め、励まし、労わり、勇気を与えるが、それが、言葉の持つ体感温度、その温もりで、言葉の力で抱き寄せ、抱きしめるのであるから殊更に効果的であり、意味深いことである。昔ばなしの語りにはその双方の相乗効果の活力がある。

学生たちのアンケートには彼らの言葉への資質・志向性は十分に備わっていると思われるものが見えているが、この部分とく昔ばなし>との関わり、そしてかれらが言葉に持っている思い、託すこと等々については次のところで述べたいと考えている。

#### 参考・引用文献

- 野口恵子 「かなり気がかりな日本語」 集英社  
松居 直 「絵本が育てる子どものころ」 日本キリスト教団出版局  
マジョリー・F・ヴァーガス、石丸 正訳「非言語コミュニケーション」 新潮社  
米川明彦 「現代若者ことば考」 丸善ライブラリー  
小林千草 「ことばの歴史学」 丸善ライブラリー  
ピカート 佐野利勝訳 「沈黙の思想」 みすず書房  
ロック 服部知文訳 「教育に関する考察」 岩波書店  
平野雅章・他 「食の名言辞典」 東京書籍